

朝鮮佛教興廢の主因に就て

忽滑谷快天

一

朝鮮佛教の起原に就ては正確なる年月の記載を見ないが、高句麗、百濟、新羅、三國鼎立時代にあることは明かである。高句麗の第十七代小獸林王の二年に、前秦の苻堅が、使者及び僧順道を遣はして佛像經卷を送ると三國史記にある。小獸林王の二年は日本の仁徳天皇六十年に相當してゐる。これより以前に佛教は半島に入つて幾分か民間に行はれてゐたらしい、けれども其正確なる記録が見えない。苻堅が佛像經卷を高句麗に送つたのは、彼が佛教の篤信者であり、且つ其勢力を半島に及ぼさんとの下、た心からでもあつたらう。苻堅は朝鮮に佛像や僧人を送つた年、即ち小獸林王の二年より八年の後、襄陽を攻略して彌天の道安を得、長安に携へ來りて五重寺に安置し、大に化門を開かしたほどで、彼の勢力が最も盛んな時であつた。されば朝鮮佛教が初めて半島に勢力を得たのは國王の權勢に因ると言ふて宜しい。國王の權勢で弘められた宗教は、兎角に其基礎が薄弱で、民心に深く入らぬ傾向がある。また朝鮮の佛教は支那の勢力に隨伴して興つたものとも言へる。其後歴代佛教の變化は支那佛教と絶えず隨伴して變化してゐること

は何人も看過すべからざる事實である。

二

高句麗は其國土が支那に接近してゐたから、最も早く佛教が東漸したのは自然の勢である。高句麗に佛教が東漸してより十三年を経て、東晋の孝武帝大元九年に印度僧摩羅難陀が支那より百濟に來り、百濟の第十五代枕流王は之を迎へて宮中に置き篤く禮敬を加へたと三國遺事に記してある。これより已前に佛教信徒は百濟にもあつたらう、けれども歴史に明記がないから、難陀を以て百濟佛教の初とする、即ち日本の仁徳天皇七十二年に當るのである。かくして百濟の佛教は支那僧の媒介によらずして、直接に印度人に依て開拓された、是れ百濟に戒律が早く行はれた原因であらうと思ふ。難陀來儀の年より後三十四年にして新羅の第十九代訥祇王が即位した、これは日本の允恭天皇の六年に相當する、此頃から新羅には佛教を信する者があつたらしい。高句麗より黒胡子なる者が來つて新羅に佛教を傳へたといふ海東高僧傳の説は多分事實であらう。黒胡子とは印度僧のことらしい。

三

新羅の第十九代訥祇王の時代から佛教は民間に行はれてゐたらしいが、國王が公然これを信するまでには至らなかつた。しかるに第二十三代法興王の十五年に始めて公然宮庭の宗教として採用せられたのである、これは日本の繼體

天皇二十二年で、高句麗の佛教より百五十七年も後れてゐる。法興王は佛教を信じて大に之を興隆せんと欲してゐたが、群臣が皆これを不可としたので、如何にしたものかと思ひ煩ふをりから、近臣に異次頓なる者があつて、群議を排して王に佛教興隆の必要なるを直言した。そこで異次頓は衆議によつて殺されたが、佛教はこれより新羅宮庭の宗教として採用せらるるに至つたのである。この時、群臣が佛教興隆に反對したる言に、今僧徒童頭異服、議論奇詭、而非^ニ常道^一、今若縦^レ之、恐有^ニ後悔^一とある。然れば當時は童頭異服、即ち剃髮染衣の僧があり、普通の朝鮮人と異つた言議をなし、常道に背くやうに見えたに相違ない。換言すれば佛教は法興王の時、突然始つたものでなく、其以前より民間に行はれてゐたのである。

四

高句麗の佛教は在來の俗信と共に行はれ、佛は多神の一として崇拜せられたものらしい。北史高句麗傳に、常に十月を以て天を祭り、佛法を信じ、鬼神を敬し、淫祠多しと記してあるのは事實であらう。第十九代廣開土王の二年、即ち日本の仁德天皇八十一年に至て、平壤に九つの大寺が創立せられ、二十一代の文咨王の七年、即ち仁賢天皇十年には金剛寺なる巨刹が建立せられ、それより史上に名を残すやうな高僧が出た。詳言せば惠亮法師は第二十四代陽原王の七年、新羅に入て僧統となり、今日我國の管長のやうな職に任ぜられた。第二十五代平原王の十八年には法師義淵が支那に入り鄴に於て法上僧統に見えて釋尊の傳記入滅の年月等を問ふて歸國した、これが朝鮮に於ける佛教紀年の

據ろとなつたのである。是より先き二十一代の文咨王の頃、僧朗法師は梁に入て佛教を學び、華嚴三論に通じて、武帝の重んずる所となつたことが、高僧傳卷八に見えてゐる。第二十六代嬰陽王の六年、即ち日本の聖德太子攝政三年に惠慈法師が日本に渡來して太子の師事する所となり、第二十七代榮留王八年には慧灌法師が日本に來つて三論を弘め僧正に任ぜられ、道登法師も亦榮留王の十一年に入唐して三論を究め、舒明天皇の初めに日本に來つて三論を弘めたことは著名の史實である。

上述の如く高勾麗の佛教は一時に隆昌の運に向つたけれども、二十七代榮留王の時は唐の高祖太宗の時代で其勢力は旭日の昇るが如く、威力が半島に加つたため、唐人の推尊した老子の道教が朝鮮に輸入せられた。これは勾麗の王臣が唐の意を迎へるため、上表して道士を招き入れたものである。道教の輸入とともに、佛教は衰頽したが、勾麗の國運も亦傾いて、第二十八代寶藏王の二十七年、唐のために滅ぼされた。これが日本の天智天皇の七年である。高勾麗の佛教が支那の勢力に隨伴して興り、また其勢力に隨伴して衰へたことは注目に値ひする。

五

百濟の佛教は第十五代枕流王の元年、摩羅難陀の渡來以後、漸次に盛んになつたらしい。しかし其後百四十餘年、史に盛衰の狀を記してない。第二十六代の聖王の四年、即ち日本の繼體天皇二十年に、謙益法師が印度より求法して歸つた。百濟へは印度僧が布教した結果、直接印度に求法する機運が開けたものであらう。謙益に中印度の常伽耶大律

寺に至て、五年間、梵文を學び、戒律を究めて、梵僧倍達多三藏と與に梵本の阿毗曇藏五部律を持て國に歸つた。聖王は謙益一行を迎へて興輪寺に安じ、國內の名僧二十八人を召して謙益法師と協力して、律部七十二卷を譯した。是に於て曇旭恵仁の二法師は律疏三十六卷を著はして王に進め、王は毗曇新律の序を作つて台耀殿に奉藏し、之を刊行して廣布せんと欲したるも、未だ違あらずして薨去したと彌勒佛光寺事蹟に記してある。聖王は其三十年に佛像經卷を日本に送つて、欽明天皇に進獻した、これが天皇の十三年である。百濟は高句麗や新羅と絶えず争奪戰に従事して國運が危くなつたから、日本の後援を頼みとしたもので、王が佛像經卷を日本に送つたのも、日本の好意を得るにあつたらしい。百濟には佛工寺工などの巧みな人が多くあつたから、之を日本に送つて日本の佛教建築にも貢獻した。百濟に戒律に於て特に秀でた僧が多いので、蘇我馬子は百濟の僧を請して受戒の法を問ひ、善信尼等を百濟に遣はして戒律を學ばしめた。第二十七代威徳王の四十二年、即ち推古天皇の三年に渡日したる惠聰法師は戒律に精通して、蘇我馬子に授戒し、三寶の棟梁と仰がれた。第二十九代法王の元年、聖徳太子攝政七年には殺生を禁じ、民家に養ふ所の鷹鶴を放ち、また漁獵の具を焼いたが、これは戒律に拘泥した餘弊であらう。當時百濟の王威は非常に薄弱であつて、士氣は一向に振はない、しかるに是の如き消極的な政策が行はれたのは、亡國の兆と云うてよい。第三十代の武王の三年、聖徳太子攝政十年には、觀勒法師が日本に遊び、曆本天文地理、及び遁甲方術の書を獻じた。觀勒は三論の學匠で、兼て外典に通じた。彼は百濟の滅亡を豫期して日本に移住したものであらう。第三十一代義慈王の二十年、齊明天皇の六年、唐と新羅との聯合軍が百濟を襲ひ、王を俘として唐に送つた。百濟は印度より直接に佛教を受けて、

律學を盛んにした、けれども印度風の戒律主義は人心を柔弱ならしめ、士氣を沮喪せしむる惧れがある。百濟亡國の一因として戒律佛教を算することができやう。

六

新羅の佛教は第二十三代法興王の時より公然宮庭に於て信奉せられ、王の二十一年、安閑天皇元年、大王興輪寺が創立せられた、これが新羅國王創寺の始めである。しかし民間にあつては、第十九代訥祗王時代より佛教は行はれて、百年以上にも及んでゐる。法興王の薨じたとき哀公寺へ葬つたと記してあるから、興輪寺の他に寺刹があつたことを示してゐる。第二十四代の眞興王は法興王よりも熱心な佛教信者で、皇龍寺を建立したり、丈六の佛像を作つたり、晩年には祝髮して法雲と號し、王妃も亦尼となつて一生を終つた。王の時に玄光法師は入陳して南岳惠思禪師に見え、法華三昧を證して、天台の法門を新羅に傳へた。また覺徳法師は梁に入て求法し、武帝の使者とともに佛舍利を將來し、高句麗の惠亮法師も來て僧統となり、安弘法師は周に入りて求法し、化天竺烏菴國の毗摩羅眞諦等二人と共に歸つて、楞伽勝鬘二經を奉つた。第二十六代眞平王の時には圓光法師が入陳して金陵に至り、莊嚴寺僧旻の弟子に就て講經を聽き、諸方に遊學して成實涅槃等を學び、また四阿含を綜涉し八定に通達し、隋の開皇九年京師に道聲を振ひ、王の二十二年に東に還つた。眞平王の代より第二十七代善徳王の代に互つて元曉法師が出世した。元曉は不出世の偉材で殆んど無師獨悟し、一讀經論の要義を曉るの力があつた。彼には八十部以上の著書があり、現存せるものだけでも

十六部もあつて、朝鮮佛教中、空前絶後の大著作を成した。彼が大體の思想は華嚴に本づいてゐる。彼は後に捨戒して妻を納れ、子を産んで薛聰と名けたが、聰は新羅十賢の一といはれ、經術文章二つながら能くした。聰の子に仲業といふ者があつて、日本に使い、光仁天皇の寶龜十年に我國に來つたことが續日本紀に見えてゐる。二十七代善徳王の三年、即ち舒明天皇の六年には、芬皇寺を創立し、天文臺を建てた、此二つは今以て慶州の名勝として残つてゐる。王の四年に明朗法師が唐より還て密教を傳へ、五年にまた慈藏法師が入唐して修學の後、太宗皇帝より大藏經一部竝に佛像等を賜はり、王の十二年に本國に還つた。それより大國統に任ぜられ、靈鷲山通慶寺を創立して、ここに戒壇を築き、入唐中に感得したる佛舍利を安置した。また彼は善徳王に勸めて百濟より良匠を僱ひ、九層塔を皇龍寺に建て、支那より將來したる舍利を奉安した、此塔と丈六佛像と眞平王の玉帶とを新羅の三寶といふのである。

七

新羅の第三十代文武王の三年、日本天智天皇の二年に、新羅は百濟を滅ぼし、また王の八年、天智天皇の七年に、高句麗を滅ぼして三國を一統し、新羅全盛の時代となつた。三國の一統は唐の力によつて成就せられたので、新羅は唐を助けて敵國を滅ぼし、三國を合して唐に臣従することとなつたのである。されば新羅全盛時代と雖も、半島が獨立の王國となつたのではない。けれども内亂が無くなつたので文化の進歩に好都合となり、佛教も大に盛んになつた。文武王の十年、天智天皇の九年に唐より還つた義湘法師は元曉法師と並び稱せられる高僧で、終南山至相寺の智儼に

從學し、華嚴の妙旨を得て歸國し、王命によつて浮石寺を創し、是に於て一乘を開演した。法師には表訓、義寂等の十大弟子があつて華嚴を弘通し、後には十六刹が華嚴道場となつたと記されてある。元曉と義湘との力によつて華嚴は全鮮に波及し、現今に至るまで、教學といへば華嚴と思はれてゐる。三國を一統した文武王は佛教の篤信者で、遺命して其屍を茶毗したほどであるから、能く佛教全盛時代を導き出したのである。義湘と同時の圓測法師は入唐して玄奘三藏に學び、玄奘の高弟慈恩と對立して唯識を唱道し、十數部の名著を出した。また第三十一代神文王の時に國老となつた憬興は二十數部の著書を出した唯識の達者である。第三十五代景德王の時には慶州の佛國寺石佛寺などができ、大賢法師は法相の巨匠として四十餘部の著作がある。法師は圓測の弟子なる道證の門人であるといはれてゐる。また律師眞表は景德王の歸依を受け、王に菩薩戒を授けた。

八

新羅一統時代は朝鮮佛教の黄金時代で、唐代文化の極盛期に當つてゐたので、六朝以來の文物を輸入して佛教藝術の發達は其頂點に達した。當時新羅の都城なる慶州の内外には八百八寺の伽藍が林立してゐたと傳へられてゐる。現に京城の博物館に存する金銅の彌勒菩薩像の如きは端嚴の妙相、我推古式佛像と照應して北魏の形式を傳へ、同館の藥師如來坐像、現存佛國寺の大日彌陀の銅像、相栗の藥師立像の如きは雄偉端麗にして、人目を眩するに足る。殊に石佛寺の釋迦如來、周壁の金剛力士、四天王、十大弟子、十一面觀音像の如きは、新羅彫刻の代表的傑作で、東洋第一

の稱がある。第三十五代景德王の代に發見された四面佛石も現存して、好古の士をして徘徊去る能はざらしめる。古塔には第二十七代善徳王の三年に作られたる九層塔の下三層が残存してゐる他、永敬寺趾の三重石塔、淨惠寺の十三層塔、景德王十年建立の佛國寺多寶塔、釋尊塔の如きは、奇古優美にして代表的作品である。慶州溫古閣に現存する梵鐘は景德王の子なる真恭王が祖父聖徳王の爲に鑄造したもので、雄渾壯麗、全鮮第一である。

九

この時代には念佛も流行して、第三十代文武王の時、沙門廣徳が十六觀を修し、其友嚴莊も念佛して西昇したと記されてある。第三十五代景德王の時には康州の人が數十名、萬日會を修して、西方を欣求し、また五比丘ありて念佛して西に向て去つたとある。また觀音靈驗の信仰も行はれ、眞言密教の祈禱も強く人心を吸収したのである。この時の方て新たに傳はつて來たのが禪である。禪は梁の達磨大師以來、漸次に教田を擴めて四祖道信禪師の時は大に世人の注目を惹くやうになつた。そこで新羅の法朗法師が第二十七代善徳王の頃に入唐して四祖に見え、新宗を傳へて還つたが、其歸國の年月は明かでない。この法朗法師に參學したのが神行禪師で、禪師は法朗に従學して後に入唐し、志空禪師に就て參禪した。志空禪師は北宗の普寂禪師の嫡嗣である。かくして神行禪師は北宗を傳へて東に還り、智異山斷俗寺に住して化門を建立した。禪師が入唐及び歸國の年月は明かに知り難いが、景德王時代に道聲を振ふたものと思はるる。されば法朗法師が四祖の禪を傳へたのを初傳とし、神行禪師が北宗を傳へたのを第二傳として宜しいと

思ふ。神行禪師の法系は後に曦陽山の一派となつて所謂禪門九山の一である。神行禪師の遷化したのは第三十六代惠恭王の十五年で、それより四十餘年を経て、第四十一代憲徳王の十三年、日本嵯峨天皇十二年に、道義禪師が南禪を傳へた。禪師は第三十七代宣徳王五年に入唐し、西堂百丈の二大老に參じ、西堂智藏の法を得て、憲徳王の十三年に歸國した。道義禪師の法系が後に至て迦智山の一派として、禪門九山の一となつた。道義禪師と同時に西堂の法を傳へたる洪涉禪師が憲徳王の代に東に還つて、南禪を唱道した。道義禪師は江原道雪岳陳田寺に住し、洪涉禪師は全羅南道智異山に住したから、北山の義、南山の陟と謂はれ、南北に化門を分つたのである。洪涉禪師の法系が後に實相山の一派として、禪門九山の一となつたのである。

十

四十二代興徳王の五年、日本淳和天皇長七年に、慧昭禪師が馬祖門下の滄州神鑑禪師の法を得て歸國し、今の智異山雙溪寺に住して大に玄風を振ひ興した。慧昭の歸國より九年後れて、第四十五代神武王元年、日本仁明天皇承和六年に、惠哲禪師が亦西堂の法を得て還り、第四十六代文聖王の重んずる所となり、其法案は桐裏山の一派として禪門九山の一となつた。同又文聖王の七年、日本仁明天皇承和十二年に、無染禪師が蒲州麻谷山寶徹禪師の法を得て國に還り、第四十七代憲安王、第四十八代景文王の師となり、聖住山の一派を開いた、これ亦禪門九山の一である。無染禪師の歸國より二年後れて、第四十六代文聖王の九年、馬祖門下鹽官の法を得たる梵日禪師が歸國し、閔嶺山の一派

を開いた、是れ亦禪門九山の一である。禪門寶藏錄によれば梵日禪師は奇異なる説を立てた人である。即ち釋尊は見星悟道だけでも、究竟の法に非ずと知て、數十月間遊行して、眞歸祖師なる者を尋訪し、始めて玄極の旨を傳へた、是れ乃ち教外別傳であると。梵日禪師と同年に南泉門下の禪を新羅に傳へた道允禪師があり、其門下に折中禪師が出て、第四十九代憲康王、第五十代定康王の歸依を受けて師子山の一派を開いた、是れ亦禪門九山の一である。また第四十八代景文王の六年、仰山の禪を傳へて歸國した大通禪師がある。且つ、同王の代には道憲國師智詵が大に曦陽山に玄風を振作した。第四十九代憲康王の十一年、日本光孝天皇仁和元年には、行寂禪師が石霜慶諸門下の禪を傳へて歸國し、第五十二代孝恭王の國師となり、順之禪師が仰山慧寂門下の禪を傳へたのも第四十八代景文王より第四十九代憲康王の時にある。梵日禪師の入室の弟子なる開清禪師は第五十五代景哀王の崇信を受け、國師の禮遇を受けた。是より先き第四十三代僖康王の二年に章敬門下の禪を傳へて歸國したる玄昱禪師は第四十四代閔哀王、第四十五代神武王、第四十六代文聖王の崇信を受け、其法系が鳳林山の一派として、禪門九山の一となつた。また五十二代孝恭王の十五年に利嚴が曹洞宗を傳へて國に還つた。而して其法系が須彌山の一派として、禪門九山の一となつたのである。新羅は第五十六代敬順王に至つて國弱く勢ひ微にして自ら守る能はず、群臣と議して高麗の太祖に降つて滅亡した、これは王の八年で、日本の朱雀天皇承平五年である。

かくして朝鮮禪道の興隆は憲德王の時に始まつて、新羅の末に至り、禪門九山の成立を見た。この時代は唐の穆宗皇帝から五代後唐の明宗帝までに當る、即ち馬祖門下の最も盛んであつた時から雪峰玄沙二禪師の時代までで、支那禪

宗の花と言はれた高僧の輩出した際であるから、入唐求法の新羅僧が、皆禪宗を傳へたのである。果して然れば朝鮮の禪道は支那禪宗の延長というて差支ない。換言すれば朝鮮禪道興隆の原因は支那禪道の勢力に隨伴したものである。

十一

新羅を滅ぼして全半島の主權を握つた高麗の太祖王建は支那五代の後唐莊宗、明宗、後晋の高祖などと同時にあるから、支那から壓迫せられる悞れが無く、殆んど獨立して國家を經營することができた。彼は佛教の篤信者であつたが、佛教を鎮護國家の祈禱として利用するに止つて、佛教精神を實行する政治家では無かつた。彼の最も信任した禪僧は道詵禪師で、禪師は桐裏山の惠哲國師の門人であるが、風水を占ふことを以て太祖の信任を得たのである。王は非常な迷信家で、創業の際、海賊が來り侵すので眞言僧に命じて賊を禳ふ祈禱をさせたほどである。尤も是の如き祈禱は新羅の諸王も行つたこととて太祖に限つたことではない。しかし祈禱が高麗一代の風潮となつたことは注意すべきである。太祖は即位の元年から八關會を設けて、佛事とも遊興ともつかぬ御祭騒ぎをした。また二年には開城の都に十箇の大寺を創立し、五年には廣明寺、日月寺、七年には外帝釋院、興國寺といふやうに、寺刹を作り、諸州に勅して造佛造塔、幾んど三千五百餘所に及んだといふ。太祖は前記の道詵や利嚴の外に慶甫、兢讓、玄暉、麗嚴、璨幽、允多、忠湛等の諸禪師を寵遇した。けれども其信仰は鎮護國家であつたから、或時内奉卿の崔凝に告ていふ、昔し新羅は九層塔を建て一統の業を成せり、今開京に七層塔を建て、西京に九層塔を建て、冀くば玄功を借り群醜を除き、三韓を合

して一となさんと欲すというた。

十二

高麗朝の諸王は太祖の遺訓によつて益々佛教を盛んにし、第四代光宗王の二年には城南に大報恩寺を創して太祖の願堂とし東郊に佛日寺を創して先妣の願堂とした。また王の九年、日本村上天皇天徳二年、始めて科擧の制を設け、此科擧に倣つて僧科を設け、試験に依て得度を許し、僧階を授けるやうにした。王の十九年、日本冷泉天皇安和元年、始めて國師王師の制を設け、惠居法師を國師に、坦文法師を王師に任じた。第六代成宗王の時は、宋の太宗皇帝の時、永明延壽禪師が盛名を博したので、王は三十六人の僧を選んで宋に遣はし之に參禪せしめた、されば法眼宗は此等入宋沙門に依て高麗に傳はつた。第七代穆宗王より後、佛事は益々繁くなつて其弊害が著しくなり、第八代顯宗王の元年、燃燈會、八關會などを盛んに行つてゐたが、契丹の兵が大舉入寇したので、王は難を避けて南方に逃れ、群臣と發願して大藏經の板を作り、之に依て敵兵を降伏せんとした。王は其三年に僧を内殿に集めて仁王般若を講ぜしめたり、重光寺を創立したりした。九年には僧を度する三千二百餘人、十萬僧を供養し、大慈恩玄化寺といふ大伽藍を作つたが、十八年には惠日重光寺を創し、百姓の勞弊を顧みずして、大工事を成した。玄化寺の碑陰記によれば、王は發願して邦家の鼎盛、社稷の安泰のために毎年四月八日より三日三夜彌勒菩薩會を設け、又二親のために毎年七月十五日より三日三夜阿彌陀佛會を設けたとある。第九代徳宗王は即位の年三萬僧に供養し、寺院に幸すること十回に及

んだ。第十代靖宗王は國內の民、四子ある者は一子をして出家せしむるを許した。この頃の王は絶えず萬僧供養、二萬三萬僧供養を行つたものである。第十一代文宗王の十年、日本後冷泉天皇天喜四年には、僧風の頹敗が甚しくなつて殖貨、耕畜を業とする者あり、通商買賣する者あり、寺院を營むと稱して民間に入り込み、民人と闘て血を流す者があつたと記してある。王の二十一年、興王寺を建てたが、非常なる大寺で、凡そ二千八百間、十二年にして成り、慶讚會には僧徒全集すること無數と記されてある。王の三十二年には興王寺の金塔が出来、銀を以て裏となし、金を以て表となした壯麗を極めたものである。

十三

文宗王の時は高麗佛教隆盛の頂點に達して、王の第四子が出家して義天といひ、祐世僧統に任ぜられ、宋に入て華嚴天台を研めて歸國したのは第十二代宣宗王の三年、日本白河天皇應徳三年である。義天法師は興王寺に教藏都監を置いて、宋、遼、日本より書籍を求め、一千十部四千七百四十餘卷を刊行し、また天台宗を復興して、九山禪門より名僧を募つて教學を修めしめ、大に弘法に力を致した。法師は大覺國師といはれて高麗朝の最も有名な人である。國師の門人、一時に名ある者、百六十人と碑銘にあるから、其盛況は推して知るべきである。國師の弟子で國清寺の教雄は妙應大禪師といはれ、金山寺の韶顯は威徳王師といはれて當時の龍象であつた。教雄禪師は天台、韶顯王師は法相に於て造詣が深かつたのである。第十五代肅宗王は屬々寺刹に幸して佛事を爲し遊宴の媒ともした。王は仁王會に

五萬僧に供養した。大藏會に數萬の燈を點じたり、設齋飯僧、勝て計ふべからず、其費用は莫大であつた。王が十年の詔に國民の流亡甚しく、十室に九は空しといふてある。之に加ふるに女眞が來侵して、社稷が危くなつたので、二十以上の男子は兵として訓練し、僧徒を選んで伏魔軍を組織した、これが僧軍の權輿で、肅宗王の九年、日本堀河天皇長治元年である。

官庭の佛教は祈福禳禍、妖妄不經であつたが民間に於て李資玄が獨立の禪を唱へたのは敬稱に値ひする。資玄は希夷子と號し、春川清平山文殊院に居て佛理を究め、雪峰語録を讀んで大悟し、首楞嚴經を看て心要を決した。彼は眞樂公と稱せられ特得の居士禪を唱道したのは大に吾人の快とする所である。之に反して第十七代仁宗王の如きは齋醮を頻煩にし、三萬僧に供養すること十三回、奇怪なる佛事を行ひ、妖僧妙清の言に惑ふて都を遷さんとしたが、妙清等は叛亂を企て誅せられて了つた。義天法師の天台は對立して祖師禪を唱へたのは學一禪師である。學一禪師は、仁宗王の王師となり、識見も高かつたが、祈願佛教の弊を脱してゐない。また大鑑國師坦然も仁宗王の顧問に備はり、宋僧にも重んじられたが法門の紊亂を救ふ力が無かつた。十八代毅宗王は卜者の説を信じて妖妄なる佛事をなし、僧人は王宮に盈ち、恩を恃み官に附し、百姓を侵し、寺塔を造るのみにあらず、王は寵僧と詩を作り、宴を張り縱恣度なくして、武臣の憤怒を來し、遂に李義方等の爲に巨濟島に流された。

第十九代明宗王は理國の力なく、軍國の大事を武臣に任せ、叛臣逆徒の跳梁を來し、奪掠流血日に行はるる状態で、大寺の僧徒は干戈を執て權勢の爭奪に従事した。且つ宮中に出入してゐる宮女を汚すやうな輩もあつた。王の二十二年、嬖妾の子を僧となして、宮中に居らしめ小君と稱して頗る威福を張つた。それより多く嬖妾の子が僧となつて大寺に住したり、賄賂を納れたりして、王道も佛道も二つながら衰へた。是の如き世相の中にあつて純眞なる禪道を唱道したのが普照國師知訥である。國師は第二十代神宗王、第二十一代熙宗王の時に獨立の宗旨を立てた名僧である。彼は六祖壇經を讀んで自得する所があり、李長者の華嚴論を見て圓頓の妙旨を味ひ、定惠均等、日夜に怠らず。神宗王の元年に智異山に入て、内觀を修し、一日大惠語錄を讀んで忽然として契會した。神宗王の三年、日本土御門天皇正治二年、移つて松廣山吉祥寺に住した、この寺が今の順天郡曹溪山松廣寺である。此處に住すること十一年、禪を修し、道を談じ、四方より學者が來り集つて一大禪林となり、王公士庶、名を投じて社に入る者、數百人に及んだ。國師は人に勧めて、金剛經を誦せしめ、六祖壇經を演べ、開くに李長者の華嚴論を以てし、大惠語錄を以て羽翼とした。禪學の盛んなる古今無比と謂はれ、第二十一代熙宗王は其道譽を欽して吉祥寺を曹溪山修禪社と名け、親ら題榜を書し、且つ滿繡の袈裟を下賜せられた。國師の著書なる真心直説は古今其比を見ざる良書で、禪教の要訣を極めて簡單に記してある。國師の禪は支那より傳へたのでなく、無師自悟の法門で、達磨の純禪に契ふ所が多い。國師には誠初心學人文があつて、初學のために懇切な訓誨を垂れてゐる。修心訣にも真心直説と同じ趣意を陳べてあり、頓悟漸修を力説してある。法集別行錄節要並入私記は國師の力量を示すに足る好著である。國師の禪は華嚴に立脚し、圭峯宗密禪

師、清涼澄觀禪師、永明延壽禪師などを證權としてゐる。圓頓成佛論は禪に關する教者の誤解を説き、禪が華嚴一乘の旨に契ふことを示し、又看話決疑論は教者の疑網を解き、看話の本意を曉すにあるが、看話禪の窠臼に落ちてゐる。念佛要門は時人が放逸無戒にして、妄に念佛して往生せんと欲するの非を示したものである。要するに國師は半島の佛教史中、稀に見る所の學德兼備の高僧である。

十五

神宗熙宗の二王は庸主であつて、政教二つながら衰へた。神宗王の元年竝に五年に大山巨剎の僧徒が賊に加つて戦つた記事があるし、熙宗王の七年には王が權臣崔忠獻を殺さんとして僧徒を用ひ、僧徒は忠獻の兵と戦て敗走し、王は忠獻の爲に江華島に流された。また第二十三代高宗王の三年には契丹の兵が入寇し、四年には諸大寺の僧にして丹兵と戦つたものが、崔忠獻を謀殺せんとして、却て忠獻のために敗られ、八百餘人の僧徒が殺された。王の十年に忠獻の子、崔瑀は黄金の十三層塔を造つて興王寺に置き、十三年には瑀が瘡を病んだので、朝野の士が、皆齋を設け疏を作つて祈禱したので、都下の評價が上つたといはれてゐる。如何に祈禱思想が盛んであつたかが知れやう。

祈禱や靈驗は佛教の第二次的産物である。之を以て第一次的のものとして心得たのが抑も誤りである。高麗の佛教は一方に普照國師の如き健全な禪者があつたけれども、大多數の僧徒は祈禱主義であり、且つ世の亂れに伴ふて僧徒が兵亂に加はつたから、益々腐敗したものである。(未盡)